

特別展記念講演会

平成24年11月11日(日)、歴史資料館講座室にて、第31回特別展の記念講演会を開催しました。講師に神戸市立博物館学芸員の三好唯義氏をお招きし、「古地図に見る大分ー日本図の歴史をたどりながら」の演題で約2時間ご講演いただきました。

講演会では、行基図とよばれる儀を積み重ねたような単純な姿の日本地図から、伊能忠敬が全国の海岸線を測量して完成させた実測日本図まで、さまざまな地図を紹介しながら、日本地図の発達の歴史について解説されました。日本地図は、ヨーロッパでの世界地図作成の動きと深く関わりながら発達したこと、そして日本地図が完成していくことがヨーロッパの世界地図完成史上においても大きな意味を持ったことなどが述べられました。

そうした日本地図・世界地図の発達の歴史の中で、オルテリウスのタルタリア図(1570年刊)やティセラの日本図(1595年刊)にいち早く豊後や日出・府内・佐賀関などの地名が載せられ、広くヨーロッパへ知れわたった意味はたいへん大きく、これらはポルトガル人が九州を北上する経路に関わりがあった場所だろうとも述べられました。また、江戸時代の「大分」の特徴が窺える地図として、天保13年(1842)に大阪の版元から出版された「豊後国絵図」が紹介され、それは印刷された国絵図としては九州で唯一のものであり、当時それだけ豊後の地図の需用が大きかったのか、或いは大阪との強いつながりがあったのかなど、大分の歴史を理解する上で注目されると述べられました。

参加された55名の方々は、様々な地図を事例に語られた講演の内容に、たいへん興味深く聞き入っていました。



講演風景

利用案内

■開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)  
■休館日 月曜日 但し祝日の場合は開館  
但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日  
祝日の翌日 但し土・日曜の場合は開館  
年末年始 12月28日～1月4日

■観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)  
中学生以下 無料 ※団体は20名以上  
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。  
◎入館時に受付で手帳を提示してください。

■交通機関 ・JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分  
・大分バス[国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分  
・大分自動車道 大分I.C・光吉I.Cよりとも約15分

発行日：平成24年12月15日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880 Fax097-549-5766

※大分市ホームページの「観光・魅力」>歴史・文化財>歴史・文化を学ぶ>大分市歴史資料館」も併せてご覧下さい。

(http://www.city.oita.oita.jp/)

ふれあい歴史体験講座

定員 各回70名程度(先着順)  
時間 午前の部 9時30分～(約2時間)  
午後の部 14時00分～(約2時間)



	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第15回	1月19日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	1月5日(土)
第16回	2月2日(土)	土笛作り	午前・午後	50円	1月18日(金)
第17回	2月16日(土)	粘土はにわ作り	午前・午後	220円	2月4日(月)

応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。  
(大分市歴史資料館:097-549-0880)

テーマ展示解説講座

内容 講座室でテーマ展示Ⅲ「くらしの道具 今むかし」について、スライドなどで解説した後、展示会場を案内します。

日時 1月13日(日) 14時～15時30分  
参加費 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

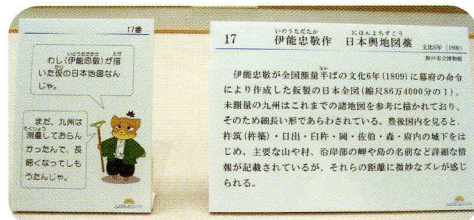
★上記の各講座等の参加者は観覧料が無料になります。

休館日のお知らせ

歴史資料館は、年末年始の12月28日(金)から翌25年1月4日(金)まで休館いたします。

特別展 ～お子様連れ用解説パネル～

今回の特別展では、通常の解説パネルに加えて、キャラクターが資料について簡単なコメントをする「お子様連れ用」の解説パネルを作ってみました。ことのほか好評で、お子様連れに限らず、一般のお客様からも資料をみるポイントがわかりやすくよかったと言っていただきました。ポイントを知ること、自然と通常の解説パネルにも目を通していただけるようになり、より詳しく資料をみていただけたようです。



# 大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

## ニュース

vol. 101  
2012.12.15



大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅲ  
**くらしの道具 今むかし**  
平成24年12月15日(土)～平成25年2月3日(日)

# くらしの道具 今むかし

平成24年12月15日(土)～平成25年2月3日(日)

大昔から人は、毎日の生活を便利に過ごしていくために、いろいろな道具を作り、改良してきました。くらしの中の道具には、先人たちが残してくれた知恵と工夫がつまっております。当時のくらしの様子や時代背景なども映し出されています。

本展示では、くらしの中の「つくる」「はこぶ」「たべる」「たもつ」などの様々なシーンに沿って、縄文時代から現代社会までの道具の移り変わりを紹介します。

## <はこぶ>

手に持つ、背負う、肩に担ぐ、腰に提げる、頭に載せる、動物の力を借りるなど、運ぶ方法は様々です。それに応じて運搬具も各時代の技術によって大きく変化してきました。

大分市の横尾貝塚からは、縄文時代の編み籠に入った黒曜石が発見されています。当時の編み籠は、一度にたくさんのもを運ぶための道具であると同時に、木の実などを保存するためにも利用されました。

室町時代以降、天秤棒(六尺棒)や背負子が運搬道具として使われていました。天秤棒は棒の両端に桶や甕など様々な物を吊し、肩に担いで使う道具です。背負子は、木材や藁把などを背負うためのもので、写真の背負子は、大分独特の形で豊後型背負子と呼ばれています。大八車のように車輪を利用した道具が庶民に普及するのは江戸時代からです。八人分の荷物を運べるという「代八車」から名前がついたと言われています。明治時代になると動物の力を借りる荷馬車が普及し、自動車が始まりはじめた昭和30年頃まで主要な運搬方法でした。



縄文編み籠  
※復元品



弥生土器甕

天秤棒



桶



背負子



大八車



羽釜



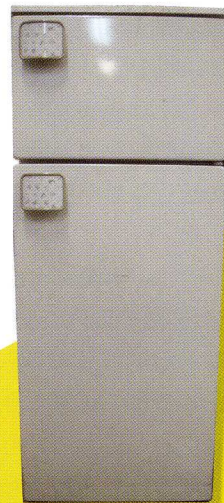
氷冷蔵庫



電気炊飯器



自動車



電気冷蔵庫

## <たもつ>

食料はそのまま保存する方法と、乾燥や発酵のように加工して保存する方法があります。そのままの保存には、昔から温湿度変化の少ない地下で保管する方法がとられてきました。

木の実が大切な食料であった縄文時代は、編み籠などに木の実を入れて貯蔵穴に保存していました。縄文時代以降の保存方法も、畑の周辺や床下に貯蔵穴を掘り、甕や桶にもものを入れる方法が一般的でした。

貯蔵穴以外の保存方法として画期的だったのが、明治36年に内国勧業博覧会で発表された氷箱です。これが改良され氷冷蔵庫となりました。氷の冷気によって保存するため、上段の棚に氷、下段にもものを入れて使います。大分市内でも昭和40年頃まで使用されていましたが、電気冷蔵庫の登場により次第に姿を消していきました。

電気冷蔵庫は、昭和5年に冷凍庫のない1ドア式が国内で生産され、昭和44年に2ドア式が登場しました。

### 表紙紹介

米を「つくる」道具の代表である鎌です。弥生時代初期に米作りの広がりとともに、木製の鎌(写真：左)が使われていました。古墳時代になると、鉄加工の技術が高まり、木の台に鉄製の刃先を付けた風呂鎌(写真：中央)が登場しました。鎌倉時代には刃すべてを鉄製にした金鎌(写真：右)も作られますが、庶民の間では依然、風呂鎌が主流でした。その後、鎌は各地の地質に合わせて改良され、江戸時代には「一里違えば鎌も違う」とまで言われました。

## <たべる>

米作りは今からおよそ2300年前から始まり、米の調理方法には、煮る、炊く、蒸すなどがありました。大分市内にある弥生時代の遺跡からも、煮炊きに使った弥生土器の甕が出土しています。

古墳時代以降、かまどの出現によって熱効率が良くなり、調理時間は短縮されました。さらに江戸時代には、鍋の回りに鰐がある鉄製の羽釜が普及します。羽釜の鰐には、かまどからのススや熱を逃がさない役割がありました。羽釜は昭和期まで代表的な調理道具として使われました。

高度経済成長期になると経済の発展とともに電化製品が普及しはじめます。昭和30年、日本で最初の電気自動炊飯器が発売され、家事の負担が大きく減ったことから「睡眠時間を1時間のばした」とまで言われました。